様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：３４４２８
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2015～2016
課題番号：１５Ｈ０６７５９

研究課題名（和文）ヘルバルト教育学における近代性の再検討―「完全性」概念を手がかりに―

研究課題名（英文）Rethinking the Concept of "Moderne" in Herbart's Pedagogy: Through the Concept of "Vollkommenheit"

研究代表者
小山　裕樹（OYAMA, Yuki）

摂南大学・外国語学部・講師

研究者番号：６０７５５４４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ヘルバルト教育学における「近代性」の問題について、以下の観点から検討した。
（1）「近代的」だと見なされている教育学的諸概念に関する再検討、（2）ヘルバルトの「完全性」概念に関する教育哲学的研究。
本研究を通して、「近代教育学」と見なされているヘルバルト教育学が有する多面的側面が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This research examined the concept of "moderne" in Herbart's pedagogy from the following viewpoints.
(1) a reexamination of the "modern" pedagogical concepts, (2) a study of the concept of "Vollkommenheit" in Herbart's thought from a viewpoint of the philosophy of education.
After this research we were able to see Herbart's pedagogy as "modern pedagogy" from various angles.

研究分野：社会科学

キーワード：教育学　思想史　西洋史　完全性　教育哲学　教育思想史　ヘルバルト

１．研究開始当初の背景

ポストモダニズムの影響下にある昨今では、いわゆる「近代性」に対して疑義が突きつけられている。こうした潮流は、そもそも近代という時代と比較的親和性の高い教育学の分野にも及んでおり、いわゆる「近代教育学」には厳しい批判の矛先が向けられている。しかしながら、一般にその「近代教育学」の代表格だと見られる向きのある 19 世紀ドイツの哲学者・心理学者・教育学者であるヨハン・フリードリヒ・ヘルバルト（Johann Friedrich Herbart 1776-1841）の教育学に即して見たとき、彼の教育学のなかにはこうした「近代性」に収まり切れない多面的側面が含まれているように思われる。そこで、本研究では、ヘルバルトの教育学を中心的な検討対象としながら、いわゆる「近代教育学」が有していると思われる多面的側面を浮かび上がらせようと考えた。以上が、研究開始当初の背景である。

２．研究の目的

以上のような背景のもとで、本研究では、ヘルバルトが自らの思想の中核的概念として用いている「完全性（Vollkommenheit）」という概念に特に着目し、この概念が有している「非近代的」側面を抽出することを通じて、「近代の教育学者」であるという従来のヘルバルト像を再検討することを目的として設定した。さらに、この研究により、直接的にはヘルバルトの思想を検討対象としながらも、より広くいわゆる「近代教育学」と呼ばれる対象領域が有するであろう多面的側面を明らかにすることを目指した。

３．研究の方法

本研究では、大きく分けて 2 つの主題に沿って研究を進めるという方法を採った。それぞれ（1）（2）と分ける形で以下のようにまとめる。

（1）一般に「近代的」だと見なされる教育学的諸概念に関する批判的再検討。

「近代教育学」が有する「近代性」を多面的に問い直すという本研究の大きな目的を達成するための予備作業として、まず、一般に「近代的」だと見なされている教育学的諸概念に関する批判的な再検討を試みた。というのも、この予備作業のもとでのみ、以下で述べる（2）の主題についてのより精緻な検討が可能となるからである。

（2）ヘルバルトの「完全性」概念に関する教育哲学的・教育思想史的研究。

本研究の中心となる主題である。ヘルバルトの「完全性」概念に特に注目し、この概念の持つ哲学的・教育学的含意を十分に吟味するなかで、一般に「近代教育学」の代表格だと見なされている彼の教育学が有する多面的側面を明らかにすることを試みた。

４．研究成果

上述した 2 つの研究主題（1）（2）のそれぞれに沿う形で、研究成果の概要を以下のようにまとめる。

（1）一般に「近代的」だと見なされる教育学的諸概念に関する批判的再検討。

「近代的」諸概念の代表格である「自律（Autonomie）」概念を取り上げて、これを批判的に再検討することを試みた。なかでも近代の「自律」思想の代表的論者であるイマヌエル･カント（Immanuel Kant 1724-1804）の哲学は、若きヘルバルトの思想形成にも大きな影響を与えており、したがって、カントの「自律」概念の再検討は、ヘルバルト研究としての射程を十分に含んでいる。

本研究では、まず、個別的な他者へ応答できないとされるカントの「意志の自律」への諸批判を検討しながら、そのように批判される当のカント哲学の解釈射程のなかに、個別的な他者へ応答するための理論的可能性が探求された。その結果、個別的な他者への応答可能性は、カント哲学の射程においてはむしろ『判断力批判』のなかで扱われる「反省的判断力」の一形態としての「美感的判断力」にこそ求められ、さらにこの「反省的判断力」の「自己自律」という考え方の方に、ポストモダンの時代における「自律」の可能性が見出されることになった（下記図書 3）。

加えて、本研究では、以上のようなカントの「美感的判断力」論の理論的受容者でもあるという側面からヘルバルトの教育思想を叙述することも試みた（下記図書 1）。ヘルバルトは、後にドイツ・ロマン主義の拠点ともなるイエナ大学において、ドイツ観念論の哲学者であるヨハン・ゴットリープ・フィヒテ（Johann Gottlieb Fichte 1762-1814）に師事しつつ学生時代を過ごした世代に属し、その意味で「美感的判断力」の育成に大きな関心を寄せた世代に属してもいた。彼は、自身の先行世代が論じてきた「道徳的判断力」の問題をむしろ「美感的判断力」の問題として根源的に捉え直すことで、カントの教育学が積み残した「道徳的自由を自ら欲するようにすることは如何にして可能なのか」という問いに対して彼なりの回答を与えていたと考えられる。すなわち、「「美感的判断力」の養成を通じてそれは可能である」というようにである。ちなみに、図書 1 におけるこうした

叙述は、ヘルバルトの教育思想全体について近年の先行研究を参照しながら手際良く見通し良くまとめたものでもある。

（2）ヘルバルトの「完全性」概念に関する教育哲学的・教育思想史的研究。

こちらは、（1）の予備的研究を踏まえながらも、本研究の中心をなす研究として行われたものである。ここでは、ヘルバルトの「完全性」概念に関して教育哲学的および教育思想史的な検討を試みた。

まず、「完全性」概念で表されるような西洋の伝統的な思考様式に着目し、この思考様式がヘルバルトの教育思想をも「裏面」から規定していると見る立場から、彼の教育思想においてこれまで十分には検討されてこなかった側面を浮かび上らせることを試みた。その結果として、ヘルバルトの教育思想のうちには、ヴォルフ学派からの影響関係のもとで「完全性」の追求それ自体を「喜び」と見なすような姿勢が見出され、さらにこの姿勢には、しばしば狭義の「近代教育学」の特徴とされる「目的-手段の関係」には収まり切れないような、いわば「自己目的的な関係」が見て取れることが明らかとなった（下記学会発表 2 および下記雑誌論文 1）。

加えて、本研究では、近年繰り返し問われている教員養成における理論-実践問題の起源をヘルバルトの教員養成論のうちに求めながら、そこにも表れる彼の「完全性」概念の歴史的含意を明らかにすることも試みた。すなわち、「完全性」概念に基づく教育ないし教員養成が必然的に要求してしまう資源の無限性という問題と、当時のプロイセン政府が要求した「近代的」な教員養成制度における資源の経済的かつ効率的な運用という方針とを比較することで、ヘルバルトの「完全性」概念が有する歴史的含意を明らかにしようとした。より具体的に言えば、経済的合理性や効率性を度外視するような教育および教員養成制度を提案したヘルバルトが、経済的合理性や効率性を優先したプロイセン政府の教員養成方針の前に挫折したという歴史的事実のうちには、西洋近代史の展開を特徴づける象徴的な意味を読み取ることができると思われる。つまりそこには、この挫折を歴史的必然だと捉え、西洋近代史のこうした展開を比較的肯定的に評価する立場が想定できると同時に、逆にそこに否定的な意味、すなわち、経済的な合理性や効率性ばかりを追求してしまったことの弊害等を読み取ることもできるかもしれない。本研究では、後者の否定的な意味の例として、教員養成において理論-実践間の乖離が生じてしまったという、今日にまで連なる重要問題について考察した（下記図書 2）。

さらに、本研究では、ヘルバルト教育学を代表する概念の一つだと見なされている「陶冶可能性（Bildsamkeit）」概念を再検討するための視点としても、彼の「完全性」概念を導入した。「陶冶可能性」概念の概念史的な来歴を辿っていくと、実は「完全性」概念との関わりが見えてくる。「陶冶可能性」概念は、ヘルバルト研究史上の長きに渡って主に教育学の学問的な自律性を問題とするような学問論的な観点から論じられてきたが、近年ではそうした研究状況に対する批判から、教育という事象を的確に分析するための概念としてこの概念を捉え直そうとする動きが生じてきている。本研究では、これらの動きを踏まえつつも、むしろそこに概念史研究という観点も盛り込むという仕方で、「完全性」概念との関わりのもと「陶冶可能性」概念を捉え直すことを試みた。なお、この点に関する研究成果は、残念ながら 2016 年度内に発表することは叶わなかったが、2017 年 7 月 1 日に開催される予定の学会にて詳しく発表されることがすでに決まっている（下記学会発表 1）。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

1. 相馬伸一・下司晶・室井麗子・<u>小山裕樹</u>・生澤繁樹「教育思想史の「裏面」を問う――「古典」はどう読まれてこなかったのか――」教育思想史学会編『近代教育フォーラム』第 25 号、2016 年 9 月、166-172 頁、執筆部分：<u>小山裕樹</u>「ヘルバルト教育思想の「裏面」を問う一つの試み――「完全性」概念に着目して――」169-171 頁（査読無し）。

〔学会発表〕（計 2 件）

1. <u>小山裕樹</u>「ヘルバルトにおける「陶冶可能性（Bildsamkeit）」概念の再検討――「完全性（Vollkommenheit）」概念との関わりから――」日本ディルタイ協会関西研究大会、於大谷大学、2017 年 7 月 1 日（予定）。

2. 相馬伸一・下司晶・室井麗子・<u>小山裕樹</u>・生澤繁樹「教育思想史の「裏面」を問う――「古典」はどう読まれてこなかったのか――」教育思想史学会第 25 会大会コロキウム 1、於慶應義塾大学、2015 年 9 月 13 日。

〔図書〕（計 3 件）

1. 眞壁宏幹編『西洋教育思想史』慶應義塾大学出版会、2016 年 4 月、執筆部分：<u>小山裕樹</u>「ヘルバルト教育学」285-302 頁（査読無し）。

2. 下司晶・須川公央・関根宏朗編『教員養成を問いなおす――制度・実践・思想――』東洋館出版社、2016 年 3 月、執筆部分：小山裕樹「教員養成における理論‐実践問題の起源を辿る――ヘルバルトの教員養成論へ――」146-162 頁（査読無し）。

3. 下司晶編『「甘え」と「自律」の教育学――ケア・道徳・関係性――』世織書房、2015 年 5 月、執筆部分：小山裕樹「「自律」観の転換に向けて――カントの反省的判断力論をめぐる諸解釈から――」157-183 頁（査読無し）。

６．研究組織

(1)研究代表者

小山裕樹（OYAMA, Yuki）
摂南大学・外国語学部・講師
研究者番号：60755445